

任脈

任為陰脈之海^①。其脈起於中極之下^②、少腹之内、會陰之分（在兩陰之間）^③、上行而外出、循曲骨（橫骨上毛際陷中）^④、上毛際、至中極（臍下四寸、膀胱之募）、同足厥陰、太陰、少陰並行腹裏、循関元（臍下三寸、小腸之募、三陰任脈之會）、歷石門（即丹田、一名命門、在臍下二寸、三焦募也）、氣海（臍下一寸半宛宛中、男子生氣之海）、會足少陰、衝脈於陰交（臍下一寸、当膀胱上口、

任は陰脈の海^①なり。其の脈は中極の下^②、少腹の内、會陰の分（兩陰の間に在り）^③より起り、上行して外に出て、曲骨（横骨の上の毛際陷中）^④を循り、毛際を上り、中極（臍下四寸、膀胱の募）に至り、足の厥陰、太陰、少陰と共に腹裏を並行し、関元（臍下三寸、小腸の募、三陰と任脈の會）^⑤を循り、石門（即ち丹田、一名命門、臍下二寸に在り、三焦の募なり）、氣海（臍下一寸半の宛宛たる中、男子生氣の海）を歴て、足の少陰、衝脈と陰交（臍下一寸、膀胱の上口に当たる、三焦の募）に會す^⑥。神関（臍中央）、水分（臍上一寸、小腸の下口に当たる）を循り、足の太陰と下脘（臍上二寸、胃の下

三焦之募^⑦）。循神関（臍中央）、水分（臍上一寸、当小腸下口）、會足太陰於下脘（臍上二寸、当胃下口）^⑧、歷建里（臍上三寸）、會手太陽、少陽、足陽明於中脘（臍上四寸、胃之募也）^⑨。上上脘（臍上五寸）^⑩、巨關（鳩尾下一寸、心之募也）、鳩尾（蔽骨下五分）^⑪、中庭（臍中下一寸六分陷中）^⑫、臚中（玉堂下一寸六分、直兩乳中間）^⑬、玉堂（紫宮下一寸六分）、紫宮（華蓋下一寸六分）、華蓋（璇璣下一寸）、璇璣（天突下一寸）、上喉嚨、會陰維於天突、廉泉（天突在結喉下四寸宛宛中、廉泉在結喉上、舌下、中央）^⑭。上頤、循承漿、与手足陽明、督脈會（唇下陷中）^⑮。環唇上、至下齦交、復出分行、循面、繫兩目下之中央、至承泣而終（目

口に当たる）^⑰に會し、建里（臍上三寸）を歴て、手の太陽、少陽、足の陽明と中脘（臍上四寸、胃の募なり）^⑱に會す。上脘（臍上五寸）^⑲、巨關（鳩尾下一寸、心の募なり）、鳩尾（蔽骨の下五分）^⑳、中庭（臍中下一寸六分陷中）、臚中（玉堂下一寸六分、兩乳の中間に直たる）^㉑、玉堂（紫宮の下一寸六分）、紫宮（華蓋の下一寸六分）、華蓋（璇璣の下一寸）、璇璣（天突の下一寸）を上り、喉嚨に上りて、陰維と天突、廉泉（天突は結喉の下四寸の宛宛たる中に在り、廉泉は結喉の上、舌下の中央に在り）に會す^㉒。頤に上り、承漿を循り、手足の陽明、督脈と會す（唇下の陷中）^㉓、唇の上を環り、下りて齦交に至り、復た出で分行し、面を循り、兩目の下の中央に繫り、承泣に至りて終る（目の下七分、瞳子に直たる陷中の二穴）^㉔。凡て二十七穴。『難經』、『甲乙經』には並びに「面を循る」以下の説なし。（図16、卷末の附図6）

下七分、直瞳子陷中、二穴^④。凡二十七穴。『難經』、『甲乙經』、並無循面以下之說。

任脈之別絡、名曰尾翳。下鳩尾、散於腹。實則腹皮痛、虛則癢搔。

『靈樞經』曰。缺盆之中任脈也、

名曰天突。其側動脈人迎、足陽明也。

「任脈の別絡は、名づけて尾翳^{びい}と曰う。鳩尾を下り、腹に散ず。実すれば則ち腹皮痛み、虚すれば癢搔^{さそう}す。」
『靈樞經』に曰く、「缺盆の中は任脈なり、名づけて天突と曰う。」其の側の動脈は人迎、足の陽明なり。

【校注】

- ① 『脈經』平奇經八脈病及び呂氏「難經」二十八難注には、「衝脈は陰經の海」とある。また楊玄操注には、「經に云う、衝脈は十二經の海なりと。此の如く則ち独り陰脈の海と為さず、恐らくは呂氏の誤りか。」とあり、後に任脈を陰脈の海と称するようになつた。
- ② 『素問』骨空論(六十)には、「任脈は、中極の下に起り、以て毛際を上り、腹裏を循り、関元を上り、咽喉に至り、頤^{かほ}を上り、面を循り、目に入る。」とある。『難經』二十八難も同じであるが、「上頤循面入目」の六字がない。『素問』の方が妥当である。
- ③ 「会陰」は、『甲乙經』では、「任脈の別絡、督脈を挟み、衝脈の会」としている。
- ④ 「曲骨」は、『甲乙經』では、「任脈、足厥陰の会」としている。
- ⑤ 「中極、関元」は、『甲乙經』では同じく「足三陰、任脈の会」としている。
- ⑥ 「陰交」は、『甲乙經』では「任脈、氣衝の会」としている。氣衝は衝脈の誤りであろう。『外台』では正しく「任脈、衝脈、少陰の会」としている。

- ⑦ 「下腕」は、『甲乙經』では、「足太陰、任脈の会」としている。
- ⑧ 「中腕」は、『甲乙經』では「手太陽、少陽、足陽明の生ずる所、任脈の会」としている。
- ⑨ 「上腕」は、『甲乙經』では「任脈、足陽明、手太陽の会」としている。
- ⑩ 「鳩尾」は、『甲乙經』では「任脈の別(絡)」としている。
- ⑪ 「臚中」は、もと交会穴ではない。『鍼灸大成』では「足太陰、少陰、手太陽、少陽、任脈の会」としているが、その根拠は明らかでない。
- ⑫ 「天突、廉泉」は、『甲乙經』では両者とも「陰維、任脈の会」としている。
- ⑬ 「承漿」は、『甲乙經』では「足陽明、任脈の会」としている。ここで「手足の陽明、督脈と会す」としている根拠は不明である。
- ⑭ 「承泣」は、『甲乙經』では「陽蹻、任脈、足陽明の会」としている。
- ⑮ 「二十七穴」は、腧交も一穴として数えているのである。『素問』氣府論(五十九)では「腧交」を任脈に入れた。王冰注では「督脈、任脈の会」と称している。腧交穴は上の齒齦にあるが、李時珍が「下腧交」としたのは、下の齒齦縫の中にあつて、その位置が承漿穴と内外相応していることを指している。
- ⑯ 『靈樞』經脈(十)からの引用で、「別」の下に「絡」を付け加えている。
- ⑰ 『靈樞』本輸(二)からの引用で、後句はもと「側之動脈、足陽明也、名曰人迎」である。

【訳注】

- (一) 横骨——恥骨のこと。
- (二) 蔽骨——胸骨剣状突起のこと。

【現代語訳】

任脈は、陰脈の海である。その脈は臍下四寸の中極穴の下方、下腹部の内部に起り、両陰の間の会陰穴から上行して体表に出る。曲骨穴を循り、陰毛の生え際から中極穴に至り、足の厥陰肝経、足の太陰脾経、足の少陰腎経とともに腹裏を並んで行き、関元穴を循り、石門穴、氣海穴を経て、陰交穴で足の少陰腎経、衝脈と交会する。さらに神闕穴（臍）、水分穴を循り、下腕穴で足の太陰脾経と交会し、建里穴を経て、中腕穴で手の太陰小腸経、手の少陽三焦経、足の陽明胃経と交会する。

さらに上って上腕、巨闕、鳩尾、中庭、膻中、王堂、紫宮、華蓋、璇璣の諸穴を経て、咽喉部の上って、天突穴と廉泉穴で陰維脈と交会する。さらに頤に上り、承漿穴を循り、そこで手の陽明大腸経、足の陽明胃経、督脈と交会する。そこから口唇の上を環り、下行して督脈の翳交穴に入る。そこからまた体表に出て、分岐し、二支は顔面を循り、両目の真下の中央の承泣穴に至って終る。合計すると二十七穴である。『難経』「甲乙経」では、ともに「顔面を循り」以下の説なし。（図16、巻末の附図5）

「任脈の別絡を尾翳という。鳩尾穴から別れて下行し、腹部に分布している。邪気を受けて実すると腹の皮が痛み、虚すると、そこが痒くなる。」

【靈樞】（本輸・第二）にはこう記されている。

「左右の缺盆穴の間を結び、これが任脈と交わるところが天突穴である。」その側らの動脈が人迎脈で足の陽明胃経である。

任脈穴圖

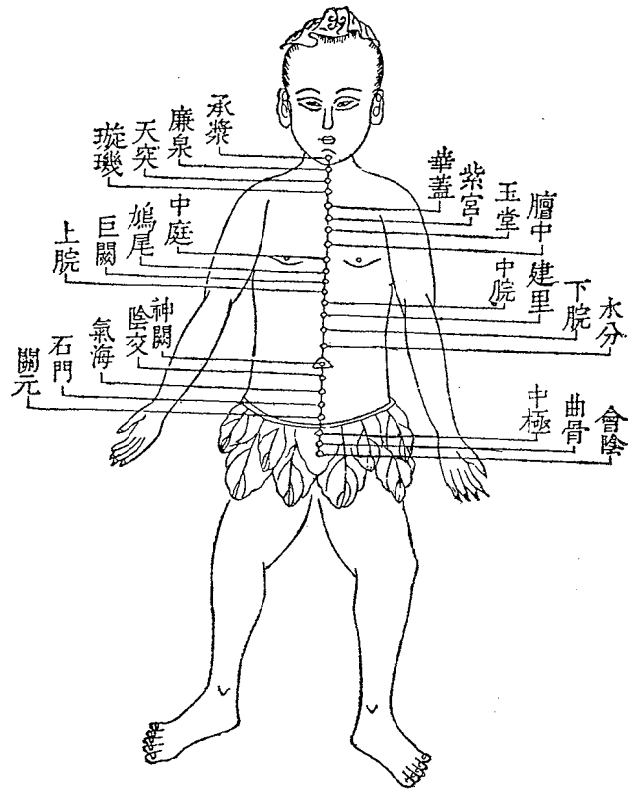


図16 任脈穴

任脈為病（任脈の病）

『素問』曰。任脈為病、男子内結七疝、女子帶下瘕聚^①。

又曰。女子二七而天癸至、任脈通、太衝脈盛、月事以時下。七七任脈虛、太衝脈衰、天癸竭、地道不通、故形壞而無子^②。

又曰。上氣有音者、治其缺盆中（謂天突穴也、陰維、任脈之會、刺一寸、灸三壯^③）。

『脈經』曰。寸口脈來緊細実、長至関者、任脈也。動苦少腹繞臍、

『素問』に曰く。「任脈の病為る、男子は内結して七疝をなし、女子は帶下と瘕聚をなす。」

又曰く。女子は「二七にして天癸至り、任脈通じ、太衝の脈盛んとなり、月事時を以て下る。」「七七にして任脈虚し、太衝の脈衰え、天癸竭き、地道通ぜず、故に形壞れて子なきなり。」

又曰く。上氣して音ある者は、其の缺盆の中を治す（天突穴を謂うなり、陰維、任脈の會、刺すこと一寸、灸すること三壯^③）。

『脈經』に曰く。寸口の「脈來ること緊細實にして、長にして関に至る者は、任脈なり。動もすれば少腹より

下引横骨、陰中切痛、取関元治之。

又曰。横寸口辺、脈丸丸者、任脈也。苦腹中有氣如指、上搶心不得俯仰、拘急^④。

臍を繞つて苦しみ、下りて横骨に引き、陰中切痛す。関元を取りて之を治す。」

又曰く。「寸口の辺に横たわり、脈の丸丸たる者は任脈なり。腹中に氣有りて指すが如く、上つて心を搶き俯仰することを得ず、拘急することに苦しむ。」

【校注】

① 『素問』骨空論（六十）よりの引用である。また『難經』二十九難には、「任の病為るや、その内、結に苦しみ、男子は七疝となり、女子は瘕聚となる。」とあり、内容がよく似ている。虞庶注では「七疝は厥疝、盤疝、寒疝、癥疝、附疝、狼疝、氣疝である。」としている。その名称は『内經』の各篇に見られるものとあまり符合しない。『素問』四時刺逆從論（六十四）には、五歳の風疝、狐疝が記載され、別の所では多くは癩疝と称しているが、七疝に関する具体的な解釈はない。

② 『素問』上古天真論（一）からの引用である。「衰」の下にもと「少」の字がある。「太衝」は『甲乙經』『太素』では「伏衝」に作る。伏衝の脈とは、衝脈の伏行するものをいう。楊上善注に「天癸は精氣なり」とある。ここでは、女子は十四歳頃になると精氣がめぐり、衝脈と任脈が通り、月経が定期的に発來するが、四十九歳頃になると、精氣が竭きて、衝脈、任脈が衰え、月経が止まり、妊娠しなくなる、と述べているのである。

③ 『素問』骨空論（六十）からの引用である。もと「其上氣有音者、治其喉中央、在缺盆中者」であり、これは天突穴の取穴を指している。

④ 二条とも『脈経』平奇経八脈病からの引用であり、文字に改変がある。「取関元治之」は、もと「取臍下三寸」である。内容は寸口脈診による任脈病の診察を述べている。

【訳注】

- (一) 七疝——諸説があるが、『諸病源候論』では、厥疝、癥疝、寒疝、氣疝、盤疝、肘疝、狼疝としている。
- (二) 癥聚——女性の下腹部に腫瘤ができて出沒する病症。
- (三) 天癸——人体の生長、発育と生殖機能を促進し、女性の月経と妊娠に必要な物質のことで、ホルモンと考えればよい。
- (四) 月事——月経。
- (五) 太衝の脈——王冰は腎脈と衝脈は合して盛大となるので太衝と曰うと述べている。
- (六) 地道通ぜず——下部の脈道が不通となる。内分泌機能が衰えることである。
- (七) 脈の丸丸たる——脈が充実している。

【現代語訳】

『素問』（骨空論篇・第六十）にはこう記されている。

「任脈に病変が発生すると、男子では寒邪が腹内に結して七種の疝病を起しやすくなり、女子では帯下や癥瘕、積聚が生じやすくなる。」

また、『素問』上古天真論篇・第一にはこう記されている。

女子は「十四歳になると、天癸が至る（内分泌機能が完成する）ので、任脈は順調に循行し、太衝の脈（衝脈）

もまた旺盛となり、月経が始まる。」「……四十九歳になると、任脈は空虚となり、太衝の脈も衰え、天癸もまた枯渇するので、月経の道も断絶してしまふ。このようにして臓器は老化してしまふので、妊娠することはできなくなる。」

また、このように記されている（骨空論篇・第六十）。

もし気が上逆して、喘鳴がある場合には、左右の缺盆穴の中央を取穴する（つまり天突穴である。陰維脈と任脈の交会穴であり、刺針の深さは一寸、灸は三壮とする）。

『脈経』にはこう記されている。

寸口の脈を診て、「緊、細、実、長であつて関部に至る場合は、任脈に病変がある。この場合には、しばしば下腹部が痛み、臍の下から恥骨部に及び、生殖器の内部に激痛が起こる。関元穴に取穴して治療する。」

またこうも記されている。

「脈が寸口の部位に充満し、丸丸とした感触がある場合は、任脈に病変がある。腹中の気が上逆し、心臓を衝き上げ、うつむくこともあおぐことも出来なくなり、腹直筋が拘急して苦しむ。」

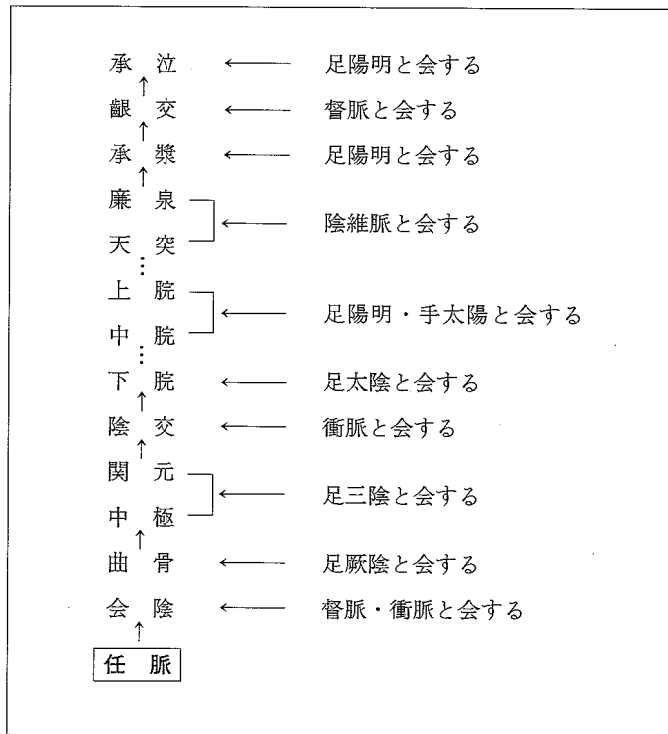
一、任脈の命名

「任」の字は担任、担保の意味がある。『説文』には「任は、保なり」とある。また妊娠の「妊」にも相通じる。『難経』楊玄操注では「任は妊なり。此は是人の生養の本。」と述べ、『素問』骨空論（六十）王冰注では「之を任脈と謂う所以は、女子は之を以て任養を得るなり。故に經に云う。此を病めば其の女子は孕まざるなり。」と述べて、この脈が人の生育機能と関連があることを指摘している。

また衣服の襟を「衽」というが、この脈は身体の前を行き、衣服の襟とも接近している。そこで『難経疏証』では、「任と衽とは通ず、其の腹裏を循りて上行するは、衽の腹前に在るがごときなり。」と述べている。各陰經はすべて腹前を行って任脈に通じているので、楊上善は「任は諸脈を維ぐ、故に任脈と曰う。」と述べ、同時に陰脈の海とも称しているが、これも同じ意味である。

二、任脈の分布と交会

任脈と衝脈とは同じく胞中から起り、下って会陰に出る。『素問』氣府論（五十九）によれば、「任脈の氣發



する所の者は二十八穴」である。王冰注では「今一穴少なし」とある。これは会陰から承漿に至る二十四穴に、承泣（足陽明と会する）左右二穴を加えた合計である。これも「頤を上り、面を循り、目に入る」の部位である。『甲乙經』では会陰を「任脈の別絡、督脈を挟み、衝脈の会」と称している。これは任、督、衝の三脈が同じく会陰穴から出ることの意味している。

任脈は陰脈の海であり、各陰經は足の三陰經を主として、任脈の中極穴と関元穴に交会する。足厥陰經は曲骨穴とも交会し、足太陰經は下脘穴とも交会し、足少陰經は督脈の長強穴とも交会する。このことから、足の三陰經の連系には共通点があると同時に、それぞれの重点もあることが判る。各陰經

は更に陰維を通じて任脈と天突と廉泉でも交会している。任脈各穴の交会関係は前頁の表の如くである。

三、任脈の弁証と施治

『素問』骨空論(六十)に「任脈の病爲る、男子は内結して七疝をなし、女子は帶下と癥聚をなす。」とあり、また「其の女子は孕まず、癥、痔、遺溺、嗑乾あり」と述べている。この病症はすべて任脈の循行部位に相当する。胞中に起り、下って会陰に出て、上って喉嚨に達するのであるから、男女生殖器、肛門、尿道、咽喉部などの症状が現れるのである。

任脈と衝脈は同じく胞中から起り、循行の関係も非常に密切であるが、その間にまた各々の特徴がある。王冰は「衝は血海と爲し、任は胞胎を主る、二者は相い資け、故に能く子有り。」と述べ、任脈が生殖機能を主り、婦女の性周期と最大の関係があるとしている。

女子は「二七にして天癸至り、任脈通じ、大衝の脈盛んとなり、月事時を以て下り、故に子有り」。「七七にして任脈虚し、太衝の脈衰少し、天癸竭き、地道通ぜず、故に形壞れて子無きなり」。任は妊である、というのがまさに以上の概括である。このように産婦人科病症では特に衝、任二脈が重視されている。

任脈の各穴は、一般にその所在部位と交会の関係によって、主治する病症が分けられる。下腹部は下焦に属するので、関元穴などは生殖、泌尿方面の病症を主治する。上腹部は中焦に属するので、中脘穴などは消化方面の病症を主治する。胸喉部は上焦に属するので、膻中穴などは呼吸、循環方面の病症を主治する。また手の太陰の絡穴である列缺は、咽喉と小便の各症を治すことができる。『鍼灸大全』では、列缺は任脈に通じているので、これと結び合わせてその主治作用を述べたのであろうとしている。(図17)

任脈の適用薬の代表は亀甲である。李時珍は「亀は鼻息を納め、能く任脈に通ず」と述べている。葉天士は鼈甲、阿膠、魚膠、淡菜、蚌水などもすべてこれに属するとし、「血肉填陰」の作用があると称している。更に知母、黄柏、玄参、生地黄などの腎火を降す薬を併用しており、その成方としては大補陰丸がある。「任は胞胎を主る」ので、紫河車、紫石英、艾葉などの暖宮薬もすべて任脈に属しており、「衝脈、任脈は同じく胞中に起る」ので、これらの薬もまた衝脈に入ることができると述べている。

【訳注】

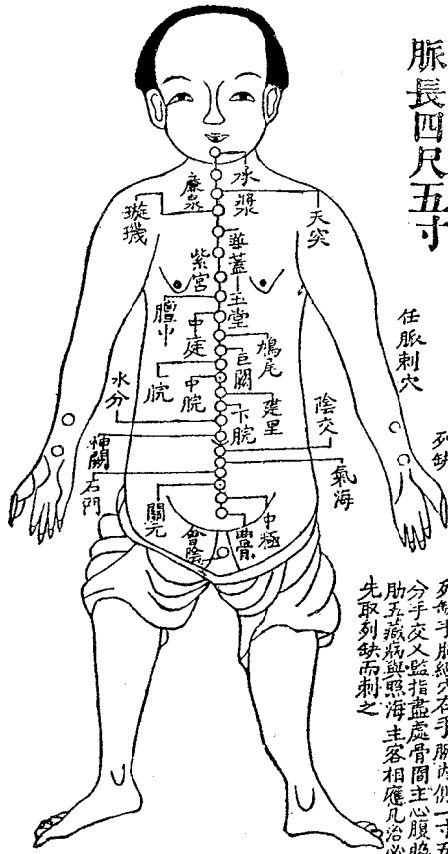
- (一) 癥——排尿困難や尿閉で下腹部が脹満する症候。
- (二) 遺溺——遺尿と同じ。夜尿症や尿失禁のこと。

任脈穴圖

脈長四尺五寸

任脈刺穴

列缺



列缺手肺經穴在手腕內側一寸五分
 分手交叉點指盡處骨間主心腹脇
 肋五藏病與照海主客相應凡治必
 先取列缺而刺之

圖 17 列缺と任脈